【用語】神祇道―神祇に関する学問　風折烏帽子―立烏帽子の頂きを折りふせた烏帽子　浄衣―白の布または生絹で仕立てた狩衣形の服　浅黄―薄い黄色　指貫―布袴・衣袴、直衣・狩衣の時に着用する袴　進退―取り扱う　執達―上意を受けて下に通達すること　神祇官―神祇の祭礼を司る役人　白川伯王―神祇官の長官である白川家　佐位郡渕名村―佐波郡境町

【解説】大工のなかでも社寺の造営をした宮大工は、神祇管領職を務めた吉田家や白川家に礼金を納めて門人となった。この文書は、神祇伯家白川家の関東執役が門人の弥勒寺河内（音次郎）へ「神祇道上棟拝揖式」を許可したものである。これにより音次郎は上棟式の際の風折烏帽子・浄衣・浅黄指貫の着用が認められた。

佐位郡渕名村の宮大工弥勒寺音次郎は、寛政八年（一七九六）那波郡長沼村（伊勢崎市）に生まれ、下渕名村の宮大工小林家の婿養子となったが、安政元年（一八五四）には白川家から門下世話役の免許状も受けている。文久三年（一八六三）門人たちによって建立された寿蔵碑（弥勒寺家墓地に現存）によれば、安政五年の江戸大火で焼失した伊勢崎藩酒井氏の愛宕下屋敷の再建を請け負い、領主から恩賞を賜ったという。製作品には冠稲荷神社（棟梁）や長楽寺山門（彫物棟梁）などがある。また、音次郎の長男音八は大工よりも彫工として名を知られ、常陸国の笠間稲荷神社本殿などの彫刻を担当している。一方、吉田家の門人としては元総社村（前橋市）の関谷出雲平貞許、龍舞村（太田市）の町田兵部栄泉などが知られている。